北区の部屋だより 第26号

2011年9月

刊行物登録番号 22-2-064

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033　北区十条台 1-2-5　℡03-5993-1125　平成 23 年 9 月発行

北区こぼれ話 第２５回

村を納得させる皇女（こうじょ）「和宮（かずのみや）」の下向（げこう）

みなさん有名人は好きですか？私は結構ミーハーで、図書館でドラマの撮影などがあると、誰が来ているのかとても気になります。そして、気にしていない振りをしつつも、撮影現場の周りをうろうろしてみたり･･･。でも、こうした感覚は、実は江戸時代でも同じだったのかもしれません。

そこで、現在、調査を進めている滝野川村の古文書から事例を一つ。

文久元年（1861）、仁孝（にんこう）天皇の第八皇女「和宮」が徳川 14 代将軍の家茂に嫁ぐため、中山道を江戸へと下ってきました。行列に付き従った総勢はおよそ３万人、隊列は 50kmにもおよんだといいます。ところが、あまりに大人数だったため、通常の宿場だけでは対応できず、周辺の村々へ旅宿（りょしゅく）としての役割が命じられることになりました。滝野川村でも、板橋宿が手狭だとの理由で、中山道沿いに住む 26 軒の家々に、徒頭（かちがしら）高尾惣十郎（たかおそうじゅうろう）らの旅宿が割り当てられました。

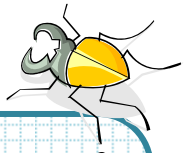
通常、こうした新たな役割が村に命じられた場合、村ではこれを回避しようと、「困窮」の村であるとか、他にもいろいろ役割を命じられているとか、何かと理由を付けて免除してくれるよう嘆願するのですが、実はこの件に関しては「御下向（ごげこう）」は「珍しき御用柄（ごようがら）」だとして「何事も打投げ、御用向諸事相勤（ごようむきしょじあいつと）め･･･」と、積極的に受け入れる姿勢を見せるのです。まあ、詳しく言えば、この 26 軒は旅宿の仕事を受ける代わりに、あれやこれやと交換条件を出していくのですが･･･。それでも、この御用が皇女「和宮」の下向という「珍しき御用」であるから受けたというのは紛れもない事実だと思います。

そもそも「和宮」の下向は、沿道では外出や商売が禁止され、高い場所から見下ろすことも許されませんでした。こうした厳重な警戒の中で行われた一大イベントに何らかのかたちで携わり、あわよくば「和宮」様をひと目見てみたい。そんな気持ちを当時の人々に推測するのは、歴史に浪漫を求めすぎでしょうか。こうした感覚は、今も昔もそんなに変わらないと思うのですが。

関連本　「和宮」
（ミネルヴァ日本評伝選）
ミネルヴァ書房 2008. 2 発行

【北区の部屋・地域資料専門員　保垣　孝幸】

北区の部屋　8～9 月企画展示



会期　8月 26 日(金)～9月 21 日(水)

北区の部屋版

夏休み自由研究

皆さん、夏休みの自由研究は無事終わりましたか？今月は「北区の部屋」へ自由研究の調べ物に来た子どもたちの課題を参考にしながら、こんなことも調べられますという「北区の部屋版」自由研究を展示します。

久しぶりの 新着地域資料紹介

書　　名	著　者・編　者	出　版　社
東京下町美食さんぽ		日本出版社
東京ノスタルジック喫茶店　２	塩沢　槙 文・写真	茉莉花社
東京ガールズ１００景	松本　きより 著	銀河出版
るるぶ上野浅草東京スカイツリー		ＪＴＢパブリッシング
東京歴史さんぽ（ぴあＭＯＯＫ）		ぴあ
渋沢栄一（岩波新書新赤版）	島田　昌和 著	岩波書店
江戸の名所（小学館 101 新書 111）	田澤　拓也 著	小学館
東京おさんぽマップ［2011］（ブルーガイドムック）		実業之日本社
るるぶ東京 ‘12（2012）		ＪＴＢパブリッシング
都電の１００年（イカロスＭＯＯＫ）		イカロス出版
広告都市・東京　増補（ちくま学芸文庫）	北田　暁大 著	筑摩書房
ぶんきょうの図書館　平成 23 年度（平成 22 年度実績）	文京区立真砂中央図書館 編	文京区立真砂中央図書館
江戸の大名屋敷を歩く（祥伝社新書）	黒田　涼 著	祥伝社
中学生モニター活動記録　平成 22 年度	北区政策経営部広報課 編	北区政策経営部広報課
みんなのあんしん介護保険 わかりやすい利用の手引き	北区健康福祉部会後保険課 編	北区健康福祉部会後保険課
東京都北区議会会議録定例会　平成 23 年度第 2 回	北区議会事務局 編	北区議会事務局

中央図書館「北区の部屋」では、北区の歴史に関わる資料を探しています！

皆さんのお宅に、北区に関わる古い写真や地図・文書などは眠っていませんか？　中央図書館「北区の部屋」では、このような資料を地域資料として収集しています。江戸・明治期だけでなく、大正・昭和の資料も地域を知るための大変貴重な資料となりますので、ぜひご一報ください。

北区の部屋だより 第27号

2011年10月

刊行物登録番号 22-2-064

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033・北区十条台 1-2-5　℡03-5993-1125・平成 23 年 10 月発行

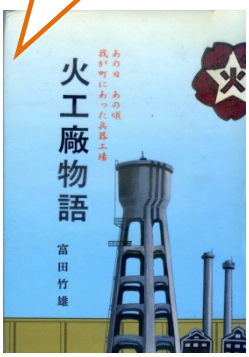
北区こぼれ話 第２６回

ふうせんばくだん 風船爆弾と北区

戦時中、北区で風船爆弾がつくられていた、と言うと驚く方もいらっしゃるでしょう。風船爆弾は、コンニャク糊で和紙を貼り合わせて大きな風船をつくり、それに爆弾や焼夷弾をつりさげた兵器です。第二次世界大戦末期、日本軍は、千葉県や茨城県、福島県などの太平洋岸から偏西風に乗せて（偏西風の吹いている場所により離陸場所を変えた）、風船爆弾をアメリカへ向け飛ばしました。しかし、ほとんどが太平洋に落ちました。ただし、米国では、細菌などが運ばれてくるのではないかと恐れるなど、心理的な効果はあったようです。

風船爆弾といえば、両国国技館や日劇で、巨大な風船を機械でふくらませたことが有名です。実は、北区にあった陸軍造兵廠でも、風船爆弾をつくっていました。学徒動員の女学生が、風船づくりをおこなっていたのです。週に１度、小学校の講堂で、各出身校ごとに、競争のように、ふくらませたそうです。それらの様子は、北区総務部女性政策課編『戦時下にくらした女性たち　もうひとつの北区史２』に詳しく書かれています。しかし、当時、風船爆弾については極秘とされていたためか、造兵廠全体においてどのように生産されていたかの記述はありません。

『火工廠物語』富田竹雄著



造兵廠での風船爆弾の生産について、より詳しく書いているのは富田竹雄著『火工廠物語』です。著者は、造兵廠の川越製造所（埼玉県ふじみ野市）にいらっしゃった方です。この本によれば、風船爆弾は「マルフ」などと呼ばれていたそうです。マルフの部品は、造兵廠の各製造所でつくられ、各打ち上げ部隊が、現地で組み立てました。搭載するエレクトロン焼夷弾は滝野川工場でつくったそうです。川越製造所では、電気門管・投下信管・爆管・導火索・焼夷弾をつくっていました。また、大宮製造所では高度維持装置をつくりました。十条台の造兵廠から王子駅（王子貨物駅）まで、風船爆弾の部品をトラックで運び、そこから常磐線で貨車輸送したそうです。直接、トラックで現地の部隊へ届けることもあったようです。

『戦時下にくらした女性たち　もうひとつの北区史２』ドメス出版

九月初めの台風のとき「偏西風が北のほうを流れていて台風の速度が遅い」というテレビの解説を見て、風船爆弾のことを思い出しました。

【北区の部屋・地域資料専門員　黒川徳男】

北区の部屋　展示
9月～10月期

バブル前の北区を空から見てみよう
―昭和５７年（１９８２）の航空写真―
９月２３日（金）～１０月２６日（水）

この時期、まだ北とぴあはありませんが、飛鳥山にタワーはありました。田端にＪＲの新幹線基地はありませんでしたが、国鉄の操車場に貨物列車がならんでいました。浮間に埼京線は通っておらず、赤羽までバスに乗りました。

そんなバブルの前の北区を空から見てみましょう。時代は、昭和５７年。いまから２９年前です。

中曽根内閣が発足し、５００円硬貨が発行され、シブガキ隊や、堀ちえみ、松本伊代、早見優、中森明菜などがデビューしたあの年です。

北区図書館活動区民の会
地域資料部会；企画・運営

講　演　会 のお知らせ

北区の鉄道遺産群
～十条跨線橋橋梁をはじめとして～

十条跨線橋をはじめとして北区に点在する鉄道遺産群について学んでみませんか

日時：11月19日（土）午後2時～4時
場所：中央図書館　3階ホール（定員50名抽選）
講師：公益財団法人　鉄道総合技術研究所
工学博士　小野田滋　氏

※翌日２０日（日）午前１０時～１２時、講演会参加者の内、希望者（定員２０名抽選）に東十条駅と下十条運転区の見学会あり。

応募方法等、くわしくは北区ニュース10月10日号をご覧いただくか、中央図書館　事業係（☎03-5993-1125）までお問い合わせください。（11月１日申込〆切）

お知らせ

図書館活動区民の会地域資料部会
「北区の歴史を学ぶ会」

図書館活動区民の会地域資料部会では、北区に関する地域資料、特に歴史資料の保存や活用について様々な取り組みを行っています。地域資料を考える上で、先ずは北区の歴史を学ぼう！と開催されているのが「北区の歴史を学ぶ会」です。どなたでも参加できます。ぜひ、一度見に来て下さいね！

毎月第４火曜日　午後２時～４時
（月によって変更の場合あり）
場所：中央図書館　３階区民活動コーナー
毎回、学習テーマは変わりますので、初めての方でも大丈夫です！
お問い合わせは　☎03-5993-1125
中央図書館　事業係まで

中央図書館
「北区の部屋」では、
北区の歴史に
関わる資料を
探しています！

皆さんのお宅に、北区に関わる古い写真や地図・文書などは眠っていませんか？　中央図書館「北区の部屋」では、このような資料を地域資料として収集しています。江戸・明治期だけでなく、大正・昭和の資料も地域を知るための大変貴重な資料となりますので、ぜひご一報ください。

北区の部屋だより 第28号

2011年11月

刊行物登録番号 22-2-064

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033　北区十条台 1-2-5　℡03-5993-1125　平成 23 年 11 月発行

北区こぼれ話 第27回

「石神井川」の名称について

江戸時代以来、四季を通じて多くの遊覧客が訪れ、区内屈指の観光名所だった石神井川。この石神井川の異称について、みなさんはいくつご存知ですか。代表的なところを記すと、「音無川」「末無川」「滝野川」「王子川」「豊島川」そして「逆川」あたりでしょうか。

このうち最も有名なのは「音無川」でしょう。『江戸名所図会』（天保５～７年(1834～36)）や『東都名所記』（年未詳）では「音無川」と記し、紀伊国熊野の音無川を模して名付けられたと記しています。『絵本江戸土産』（嘉永３年～慶応３年(1850～67)刊）では、その静かな流れが由来だとして説明が異なりますが、やはり「音無川」として石神井川を紹介しています。

歌川広重　東都名所「王子滝の川の図」に描かれた石神井川（音無川）

『江戸図説』（安永２年(1773)成稿）では、「末無川」と記しています。説明を読むと、坂本・金杉に至り川幅も狭くなり、その末は「いつちとも見へず」として俗に「末無川」と言った、とあります。改めて言うまでもなく、この本では流末を「下郷23ケ村用水」と混同していますが、石神井川を「末無川」と紹介していることには違いありません。

石神井川を「滝野川」と呼んでいたとする書物もあります。すでに紹介している『江戸図説』も一名滝野川と載せるほか、『新編武蔵風土記稿』の滝野川村の項では、「石神井川急流ニシテ、水声四方ニ響ク事滝ニヒトシ」として、「滝ノ川」と称すようになり、それが村名ともなったと記しています。

また、地域名称として「王子川」「豊島川」と呼ばれていたことも確認されています。例えば『新編武蔵風土記稿』では王子村の項で「権現ノ社前ヲ流ルルユヘ当村ニテハ王子川ト称ス」と記しています。この他、河岸場や通船に関する地域の資料では「王子川」や「豊島川」という称が散見され、地域ごとに名称があったことが知られます。

さらには、石神井川を「逆川」と紹介する江戸時代の地誌の多いことに気づきます。北区の歴史に詳しい人は「逆川」という全く別の川が流れていたことをご存知かもしれませんが、実は石神井川を「逆川」と紹介する地誌は『続江戸砂子温故名跡志』（享保 20 年）をはじめ、『再版増補江戸惣鹿子名所大全』（寛延4 年（1751））、『武蔵演路』（安永 9 年（1780））、『新編江戸志』（寛政年間（1789～1801））『江戸図解集覧 』（文化 13 年（1816））など枚挙に暇ありません。単に、間違いだとして済ますこともできますが、こうした書物が広まるなかで、石神井川の別名として通用していたことも想像され、ここでは異称の一つとして挙げておきました。

一つの川でも、さまざまに呼ばれていたことがわかります。

みなさんは、どの名称がお好きですか？

【北区の部屋・地域資料専門員　保垣孝幸】

北区の部屋　展示
10月～11月

会期　10月28日（金）～
　　11月23日（水・祝）
場所　北区の部屋企画展示コーナー

ただいま調査中!!北区の古文書

～北区古文書調査会2010年度の活動より～

北区の部屋の作業室。ガラスの向こう側では、北区古文書調査会の調査員が北区の古文書の整理・調査を行っています。今月は、そんな彼らが2010年度に行った調査の一端を紹介します。

中央図書館主催 公開歴史講座

「陸軍の兵器工場『造兵廠（ぞうへいしょう）』の歴史をひもとく」

陸軍造兵廠の建物を保存しつつ建設された赤レンガ図書館。その中で、旧陸軍の資料を用いて、北区の兵器工場の歴史を振り返ります。

赤レンガ図書館

日時　１２月１０日（土）午後２時～４時
場所　中央図書館　３階ホール
講師　北区の部屋
　　黒川徳男地域資料専門員
定員　５０名（抽選）
対象　中学生以上
申込　往復はがきで１１月２５日（金）まで
　　詳しくは北区ニュース11/10号または
　　事業係までお問い合わせください。
問合・申込先　〒114-0033　十条台1-2-5
　　中央図書館事業係
電話　０３（５９９３）１１２５

ちょっと　地域資料　新着案内　（一部）

書　　名	著　者・編　者	出版社
語り継ぐまちづくり　西が丘		北区まちづくり公社
「もったいないごみ」をなくすためにわたしたちができること　平成23年度	北区生活環境部リサイクル課/北区清掃事務所　編	同左
北区西ヶ原遺跡　第1分冊～第4分冊・付図	東京都埋蔵文化センター/編	同左
るるぶ都電荒川線日暮里・舎人ライナー東京さんぽ		ＪＴＢパブリッシング
東京都学校名簿　平成23年度版	東京都教育委員会/編	東京教科書供給

中央図書館「北区の部屋」では、北区の歴史に関わる資料を探しています！

皆さんのお宅に、北区に関わる古い写真や地図・文書などは眠っていませんか？　中央図書館「北区の部屋」では、このような資料を地域資料として収集しています。江戸・明治期だけでなく、大正・昭和の資料も地域を知るための大変貴重な資料となりますので、ぜひご一報ください。

北区の部屋だより 第29号

2011年12月

刊行物登録番号 22-2-064

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033　北区十条台 1-2-5　℡03-5993-1125　平成 23 年 12 月発行

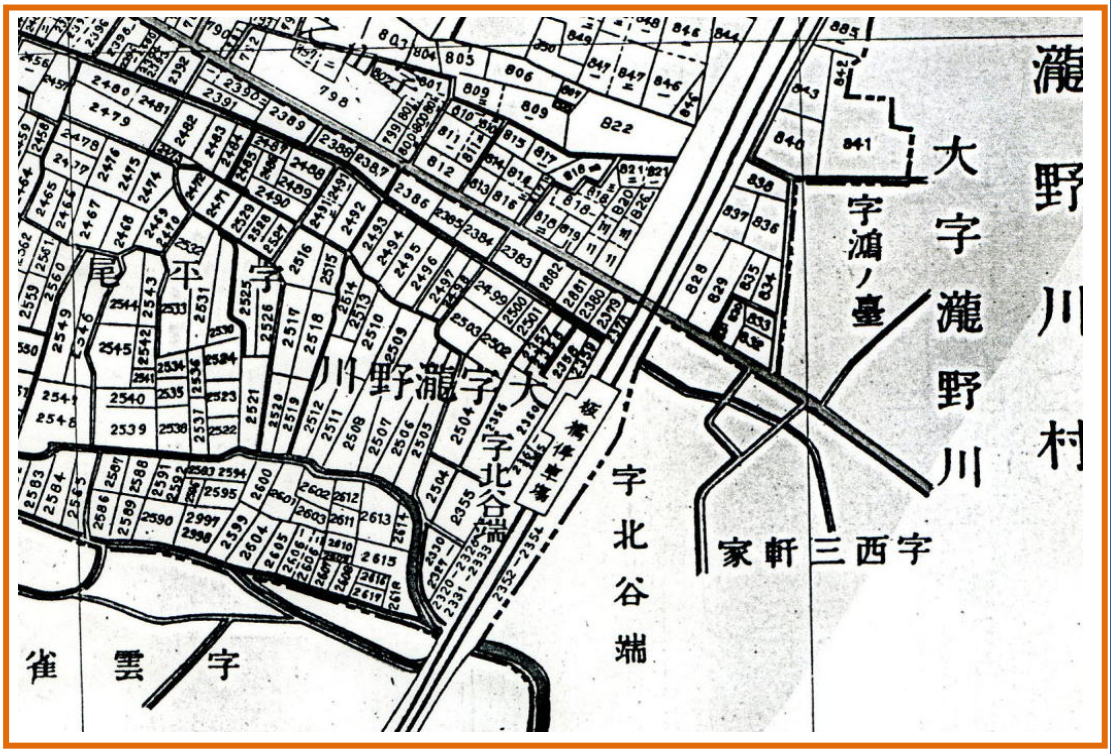
北区こぼれ話 第２８回

板橋駅の西側に大字滝野川があった

北区の部屋で、明治４４年（１９１１）の滝野川村の地図を見ていたら、ある方から「板橋のほうにも滝野川があるんだね」と声をかけられました。よく見てみると、板橋駅の西側（現在の板橋一丁目のあたり）に大字（おおあざ）滝野川と書かれています。同じ時期の板橋町の地図を確認してみると、やはり板橋駅の西に大字滝野川と書いてありました。つまり、大字滝野川は、滝野川村と板橋町の両方にあったのです。同僚の保垣さんによれば、こちら側の大字滝野川にない番地が、板橋側の大字滝野川にあったということでした。つまり、大字滝野川は、板橋町と滝野川村の二つに分割されていたのです。

さらに、細かく見てみると、板橋町の大字滝野川には、字平尾（あざひらお）と字北谷端（きたやばた）という二つの字（あざ）があります。字北谷端という地名は、線路をはさんでこちら側にもあります。分割されたあと、しばらくの間、大字だけでなく字の名前も変えず、そのままにしておいたのでしょう。

地図を見ているうちに、鉄道や道路による境界変更は、明治２２年（１８８９）の「町村制施行」（いわゆる明治の大合併）の時に、多くおこなわれたことを思い出しました。そこで、『北区史　資料編　近代』掲載の町村制施行関係の資料を見ることにしました。すると「滝野川村ノ字平尾、北谷端ノ内、鉄道以西」は板橋町に編入とありました。つまり、明治２２年以前は、板橋駅の西側も滝野川村だったのが、これ以降、板橋町に変わり、板橋町大字滝野川という地名が生まれたのでした。



【北区の部屋・地域資料専門員　黒川　徳男】

北区の部屋
今月の展示

会期：１１月２５日～１２月２８日

北区図書館活動区民の会・地域資料部会
企画展示

北区の鉄道遺産群と東十条駅、下十条運転区の見学会　報告

区民の会地域資料部会企画・運営で開催された歴史講演会（11/19 開催）関連見学会（11/20 実施）の報告をパネルで展示します。

【今月の講演会の予定】

公開歴史講座
「陸軍の兵器工場『造兵廠』の歴史をひもとく」
１２月１０日（土）午後２時～４時
講師：北区の部屋・
黒川徳男地域資料専門員
（募集は終了しました）

北区の部屋コレクション　古写真

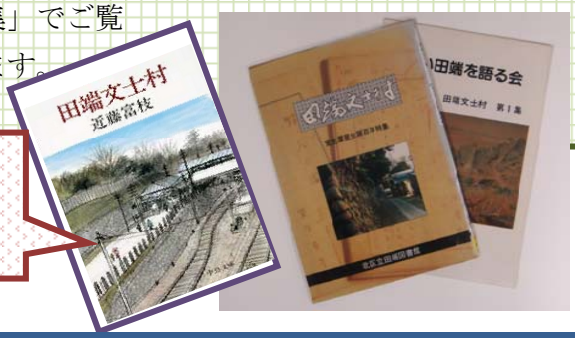
「北区の部屋」では、区内各所を写した古い写真や絵葉書を数多く所蔵しています。
懐かしい北区の姿には、ここで出会うことができます。
（実物の閲覧や貸出については、北区の部屋専門員に事前にご相談ください）
　また、現在も古い写真を集めています。
貴重な地域資料[illegible]へ
ご寄贈ください。

田端文士村記念館
北区田端 6-1-2

田端文士村記念館に行ってきました！

１１月１８日、滝野川第一小学校５年生が、地元の「田端文士村」を研究した成果を発表するというので行ってきました。
題して「田端文士村コンベンション　伝えよう！田端文士村～伝わる　伝える～」。児童の皆さんが記念館の学芸員の方々の応援も得て、田端文士村に関わる芥川龍之介や板谷波山などの文士や芸術家のことを調べ、グループごとに寸劇にして発表してくれました。とてもよく調べられていて、素晴らしい報告でした。
　田端文士村といえば、記念館が出来る前は田端図書館で様々な関連資料を収集展示していました。
田端文士村記念館開館に伴い、貴重資料は図書館から記念館に移され、展示公開されています。
　現在、田端図書館では田端文士村記念館の“ひととき散歩”事業に合わせてテーマ展示を実施しています。
また、当時の田端図書館での取り組みは、
「田端文士村第１集～８集」「田端文士村（新装版）第１～４集」でご覧いただけます。

「田端文士村」
近藤富枝/著
もお勧めです。



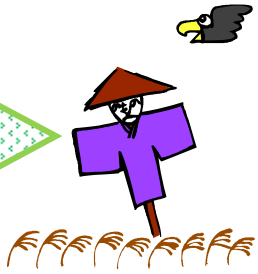
北区の部屋だより 第30号

2012年1月

刊行物登録番号 22-2-064

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033　北区十条台 1-2-5　℡03-5993-1125　平成 24 年 1 月発行

北区こぼれ話 第29回



農民の苗字（のうみん　みょうじ）

江戸時代の農民は苗字（みょうじ）を持っていなかった、と思われている方は、結構多いと思いますが、実はそんなことはありません。「北区の部屋」で地域の古文書（こもんじょ）などを整理してみると、苗字を記している古文書を見かけることがあります。そう、江戸時代の農民たちは、苗字を持っていなかったのではなく、公的に名乗（なの）れなかっただけなのです。

こうした誤解は、実際に古文書の多くが、単に「○太郎」「△兵衛」「□右衛門」などとあり、苗字を記していないことから生じたものだと理解できます。しかし、これらは、名乗れないから記していないだけのことで、村の人びとの生活に関わる部分、特に領主（りょうしゅ）が関わらない村の祭礼（さいれい）や仏事（ぶつじ）、講（こう）などの場では苗字を使っていました。

例えば、神社などに奉納（ほうのう）された石像物（せきぞうぶつ）、今でも区内各所で見られる庚申塔（こうしんとう）。よく見ると、江戸時代の造立（ぞうりゅう）であるにもかかわらず、多くの場合、奉納者（ほうのうしゃ）は苗字付きで名前を記しています。村の鎮守（ちんじゅ）の再建寄進帳（さいけんきしんちょう）などでも、苗字を確認できることが少なくありません。

滝野川 1-77 の庚申塔
鈴木幸十良、岩田十右衛門など苗字のある名前が記されています。

しかし、江戸時代の身分（みぶん）制度によって、農民は、郷士（ごうし）など旧来（きゅうらい）からの由緒（ゆいしょ）を有する者や、領主への財政援助などで新たに苗字の名乗りを許された者など、特権を付与された者を除いて苗字を名乗ることが許されていませんでした。そのため、史料に記されることは少なく、あたかも江戸時代の農民に苗字が無い、といった様相を呈したのです。

明治時代に入り、農民は何と苗字を付けようか悩んだといった逸話（いつわ）も聞きますが、多くの場合で、実はすでに苗字があり、それを名乗りはじめただけだと思います。

ちなみに、こうした姓氏（せいし）による身分統制（とうせい）は、明治政府へも引継がれ、1870 年（明治 3）9 月に国民把握の観点から苗字差許（さしゆる）しの布告が出るまで続きました。

【北区の部屋・地域資料専門員　保垣孝幸】

北区の部屋展示

１月５日～２５日

北区の神仏分離

神仏分離により、田端の赤紙仁王は、八幡神社から東覚寺へ移されました。

お正月と言えば、初詣ということで、神社仏閣にお参りする方も多いことでしょう。そこで、今回の展示では、神社や寺院の歴史の中で大事件であった神仏分離についてまとめてみました。

江戸時代、全国の村において、寺院が鎮守を管理していることが一般的でした。しかし、神仏分離により、そのようなことは、ゆるされなくなりました。明治元年（１８６８）、新政府は、神仏分離令（神仏判然令）を出し、全国の神社と寺院を明確に分けさせました。また、神社の名前に「権現」や「牛頭天王」などの仏教語がついている場合には、社名を変更しなければなりませんでした。もちろん、寺院の境内に神社があることや、神社の中に仏像があることも認められなくなりました。

神仏分離は、北区でも厳しくおこなわれました。今回の展示では、身近なところにある神仏分離の跡をご紹介します。

公開歴史講座

「陸軍の兵器工場『造兵廠』の歴史をひもとく」開催！

１２月１０日、中央図書館で北区の部屋・黒川徳男地域資料専門員の講師による歴史講座が開催されました。

【参加者の声より】

- 写真・図版を多用しての講話はゆったりした話し方と相まって非常にわかりやすかった。
- 資料が充実していた。
- 西ヶ丘の生まれで、造兵廠の歴史は一度聞いてみたかった。当時の街への影響もふれてほしかった。
- 身近な地域のため一層興味が持てるようになった。
- 時間がたりない。
- 資料を多く使おうとして欲張った感あり。テーマを絞った方がクリアになったと思う。

北区図書館活動区民の会・企画運営

歴史講演会のお知らせ

「北区の同潤会住宅について」

日時：平成２４年１月２８日（土）

午後２時～４時

場所：北区立中央図書館（赤レンガ図書館）

３階ホール

講師：港区立港郷土資料館　学芸員

川上　悠介　氏

定員：50 名（抽選）。

締切：１月１０日（火）必着。

申込：往復はがきで。

くわしくは、北区ニュース 12/20 号をご覧いただくか、北区立中央図書館事業係までお問い合わせください。

電話　03-5993-1125（代）

「北区の部屋だより」特別号　　2012年3月

北区の歴史と「おでん」

北区立中央図書館「北区の部屋」

北区史の中に見る「おでん」

現在、北区では「北区おでん」による地域振興が企画され、この３月２日（金）には、「北区おでんキックオフイベント」が行われました。

さて、冬の定番食とも言える「おでん」、当然、北区の歴史の中にもさまざまな形で登場します。そこで今回は、北区在住の髙田悦子さんが独自に調べられた「北区」と「おでん」の関係を参考にしながら、「おでん」をキーワードに、北区の歴史を振り返ってみたいと思います。

そもそも「おでん」の語源は、豆腐やこんにゃくを串に刺した「田楽」にあり、その田楽が女房言葉である「おでん」となって広まったとされます。そして、その田楽も食べ物として広く認識されるようになったのは江戸時代になってからのこと。「田楽は　昔は目で見　今は食ひ」。江戸時代の川柳にもあるように、それ以前に田楽と言えば、田楽踊りのことを指していました。

田楽踊りと言えば、北区では王子神社の例大祭で奉納される「王子田楽」が有名です。「王子田楽」は、綺麗に装飾された花笠をかぶった子どもたちが笛や太鼓の音に合わせて踊る、中世以来の様式を色濃く伝える田楽で、北区の無形民俗文化財にも指定されています。

こうした田楽を踊っていた田楽法師の衣装に似ていたことから、短冊形に切った豆腐を串に刺したものを田楽と呼ぶようになったといいます。これが何時の頃から作られるようになったか定かではありませんが、江戸時代には広く屋台などでも商われていました。

「短冊の　豆腐も売れる　花の山」。これも江戸時代の川柳ですが、短冊形に切った豆腐田楽が桜の名所で広く売られていたことを示しています。この川柳では花見の場所を特定していませんが、北区にある飛鳥山は、八代将軍徳川吉宗の命によって桜を植樹して以来、江戸屈指の桜の名所として多くの行楽客が訪れていました。山上や沿道には、多くの茶屋が並んでおり、当然、ここでも田楽が振る舞われていたものと思われます。事実、飛鳥山のふもと、滝野川村の茶屋が記した古文書には、農業の合間に、酒や団子、麺類などとともに田楽を商っていたことが記されています。

このような田楽が、現在、私たちが知っている「おでん」になったのは何時の頃からなのでしょうか。この点については定かではありませんが、江戸時代の喜田川守貞が記した随筆『守貞謾稿』という本の中で、江戸の町では、「上燗おでん」といって、燗酒とこんにゃくの田楽を売る店があったことを記しています。また、同書によれば、明和期（1764～725）頃からこんにゃくの田楽も普及しはじめ、江戸では芋の田楽も売っていたといいます。

明治に入ると、北区をはじめ関東では「おでん」は作られなくなっていったとされます。それでも、関西では、昆布で出汁をとり、薄口醤油で味付けした現在の「おでん」に近いものが「関東炊き」と呼ばれ作られ続けていました。こうした中で、大正 12 年（1923）9 月に関東大震災が起こり、甚大な被害が生じました。幸いにも難を逃れた被災者が一刻も早く東京を離れようと群衆となって田端駅や赤羽駅に集まったといいます。そして、被災者を救助するため関西方面から多くの人が集まり、炊き出しとして「関東炊き」が作られました。当然、田端駅や赤羽駅の周辺でも多くの「関東炊き」が振る舞われたことでしょう。こうして再び関東でも「おでん」が作られるようになったといいます。

また、明治時代の初めから終戦に至るまでの北区は、数多くの軍事施設が置かれ、まさに「軍都」と称されるほどでした。中でも陸軍の施設が多く、赤羽の台地上に移転してきた二つの工兵隊（第一師団・近衛）をはじめ、被服本廠や造兵廠、兵器補給廠など、さまざまな軍工廠が設置、転入しました。

こうした軍事施設の中で作られていた料理のひとつに「おでん」がありました。昭和 12 年（1937）に出された陸軍の調理教本『軍隊調理法』には、「関東煮」として「おでん」が載せられています。具は、がんもどき・こんにゃく・大根・里芋・竹輪麩の 5 種類で、味付けは、削り節で出汁をとって、醤油、砂糖で整えるといったものになっています。まさに戦前版「男の料理」といったところでしょうか。こうした軍隊版「おでん」が職工たちの家庭でも作られ、また、軍工廠に勤める軍人や職工を相手として飲食店などで売られていたとしたら、戦前の北区では、非常によく「おでん」が作られていたといってもいいのではないでしょうか。

さて、長かった戦争も終わりますが、日々の暮らしはなお多くの困難をともなっていました。中でも食糧不足は深刻で、配給だけでは十分に足りず、ヤミ市で食料を調達することも少なくなかったといいます。『日本食物史』(江原絢子ほか著、吉川弘文館、2009 年)では、「東京北区を例にすると、赤羽・十条・王子など強制疎開で空き地になった駅前広場にヤミ市が立った。･･･(中略)･･･そのうちにさ、1 間(1.8m)四方の店になって、うどんやカストリ、おでんなんかを売るようになったんだよ」と、当時の状況について紹介しています。戦後、北区のヤミ市でも「おでん」が売られていたことが確認できます。

「もはや戦後ではない」。このように『経済白書』が記したのは昭和 31 年(1956)のこと。北区でも、昭和 30 年(1955)に人口 35 万人と戦前の人口水準に戻り、その後も 1965 年まで増加の一途をたどります。こうした中で北区の工場は、昭和 24 年(1949)段階で 2 万 1327 人(794 工場)だった従業員も、昭和 31 年(1956)には 3 万 3368 人（1,359 工場）昭和 40 年（1965）には 5 万 3578 人（2,911 工場）となっています。そして、こうした工場労働者たちに好まれたのが、気軽に、そして安く食べられるファストフード「おでん」でした。城北工業地帯の一角として多くの工場が建ち並んでいたかつての北区には、そこで働く多くの工員たちを相手に、多くの「おでん」屋があったものと思われます。そして、こうした「おでん」屋に具材を卸(おろ)す「おでん種」屋もありました。

このように見ていくと、北区の「おでん」は、脈々と受け継がれているというより、その時々に、時代の状況にあったかたちで歴史の中に登場しているのかもしれません。現在でも、北区には多くの「おでん」屋や「おでん種」屋がありますが、21 世紀の北区の「おでん」はどのように展開するのでしょうか。これからの北区の「おでん」に注目です。

「おでん種」から見る北区の歴史

さて、みなさんはどんな「おでん種」が好きですか。大根・こんにゃく・さつま揚げなど、挙げていけばきりがないかもしれませんが、おでん種などを生産している大手水産メーカーの調査によると、好きな「おでん種」のベスト 10 は右の表の通りだそうです。不動の 1 位は大根で、これは全国どの地方でも大根が 1 位だったそうです。

好きなおでん種ベスト 10 （全国版）

順	おでん種	順	おでん種
①	大　根	⑥	厚揚げ
②	たまご	⑦	さつま揚げ
③	ちくわ	⑧	餅入り巾着
④	こんにゃく	⑨	ごぼう巻
⑤	はんぺん	⑩	じゃがいも

紀文:家庭の鍋料理調査(2010 年実施)より

《第 1 位　大根》

大根は北区にとって、とても関係の深い食材だというのをご存知でしょうか。江戸時代以来、北区をはじめ、練馬・板橋・荒川など、江戸・東京の北郊地域は、大根生産ベルト地帯とでも呼ぶべき一大大根生産地帯でした。「江戸近在王子辺等にて作るものの如き、見事にして味ひ美なるものは絶て見ることなし」。これは、安政 3 年（1856）に出版された随筆『浪花の風』の一部で、大阪の大根と王子の大根を比べて記している部分です。北区周辺で作られた大根は、その形状・味ともに、大阪でも絶賛されていることがわかります。

『東京府志料』（明治 5 年〈1872〉調査）によれば、区内で最も生産額が多かっ

たのは袋村で、次いで稲付村、十条村と続きます。こうした村々は、前野村・志村・小豆沢村といった隣接する板橋区域の村々とともに台地上における大根生産拠点の一つになっていたことがうかがえます。

また、北区では滝野川地域を中心に大根種の生産も盛んでした。『北豊島郡誌』の記述によれば、練馬地域では大根の生産に忙しく、大根種まで手が回らず、次第に練馬は食用、滝野川は大根種と分業が成立したといいます。

このように、かつての北区は大根生産がとても盛んでした。もしかしたら、地元の大根で「おでん」を食べていた方もいらっしゃるのではないでしょうか。

《第２位　玉子》

玉子を食べる文化は、江戸時代にはとても盛んになり、実際、多くの玉子料理に関する本も出版されています。北区で玉子と言えば、何と言っても扇屋。江戸時代の料理番付にも登場する有名料理屋で、開国後に同店を訪れた外国人に教わったという釜焼き玉子は、料理屋のお土産の始まりとも言われています。また、幕末に王子を訪れた英国人植物学者ロバート・フォーチュンは、茶屋でゆで玉子を食べたと記しています。玉子は、茶屋などで簡単に食べられるものだったこともわかります。

明治時代になると、大消費地である東京近郊に養鶏場ができていきました。明治 30（1897）年 8 月、滝野川村大字谷津に新たに創設された「平田飼禽場」もこうした養鶏場の一つ。案内書などには「学理を応用」した採卵で知られた養鶏場であったことを記しています（『東京近郊名所図会』）。

北区と玉子、あまり縁が無さそうですが意外に資料で確認できる食材です。

《第９位　ごぼう巻》

北区でごぼうといえば、滝野川ごぼうが有名です。江戸時代の滝野川地域は、滝野川にんじんや滝野川ごぼうといった地名を冠するブランド野菜が出来るほど、根菜類をとても盛んに生産していました。『北豊島郡農業志料』では、享保年間に徳川吉宗が江戸近郊に試植させたところ、滝野川の土壌がにんじん栽培に適していたことから広まったものとされ、ごぼうについても、同時期に栽培が行われたのであろうと記しています。また、江戸時代の享和年間（1801～04）に始まったものもあり（『北豊島郡誌』）、さらには、伝説によればと断った上で、その起源は元禄年間（1688～1704）にまでさかのぼるとする本もあります（『北豊島郡の園芸』）。正式に生産の起源を特定することは難しいですが、滝野川にんじんや滝野川ごぼうが、江戸時代から生産され、その品質や味をもって多くの人びとに賞賛されていたことは、明治時代以降の記録からも知ることができます。

（文責「北区の部屋」保垣孝幸）